

ファンドマネージャーの眼

ファンドマネージャー独自の視点で市況を分析



『AI を作る側と使う側』

2017年8月18日

債券運用部

最近、PC やスマホを使って資産運用のアドバイスをしてくれるロボ・アドバイザーなど、フィンテック (Fintech) に関する言葉を見かける機会が増えたと思います。そもそもフィンテックという言葉は、Finance と Technology を合わせた造語であり、ICT (情報通信技術) を駆使した革新的な金融商品・サービスという意味だそうです。このようなサービスが提供できるようになった理由には、多くのデータを入手しやすくなったことに加え、コンピューターの進化でそのデータを短時間で処理できるようになったことが挙げられると思います。ただ実際に分析をする上では、扱うデータが多くなればなるほど、それをいかに適切に処理するかというプログラムの良し悪しの影響が顕著に表れると考えられます。また分析後の結果を正しく解釈するデータサイエンティストと呼ばれる人材の需要もより高まっていくでしょう。

このように環境が変化する中で、欧米に比べればまだ遅いかもしれませんが、日本でも小学校でプログラミングが2020年から必修化されようとするなど着々と動きが見られています。もちろん、職業プログラマー以外にとっては、プログラミングはあくまでも分析などの手段に過ぎず、わざわざ小学生から必修化する必要があるかという意見もあると思います。ただ、プログラミングを学ぶことは、ただプログラムを書くという作業ができるようになるだけではなく、その背後にある論理的思考を養うことができると筆者は考えています。実際に作業する中で、機械はプログラムに書かれた通りにしか動かず、判断をする場面においてもあいまいな条件を用いることはできません。加えて、設計者の予想と異なるデータが表れた時には、プログラムは異常な動きや停止することもあります。そのため、きちんと全体の流れを把握することや、それぞれの場面で必要とされる条件、予想外の時の対応といったことを考える練習ができると思います。また、同じことを繰り返す作業は機械の得意とすることであり、この機能を十分に発揮するためにデータや作業の標準化を進め、似ているけど少し違う処理などムダな処理をなるべく減らすという考え方も養われると考えます。そしてこのような考え方は、プログラムを組むときだけに限らず、人に説明や指示を出すときにも役立つため、誰にとっても必要なものだと思います。こういう点からも、早くから論理的思考を身につける手段としてプログラミングはいい方法の一つではないかと筆者は考えています。

さて、こうした現状のフィンテックの流れの中、筆者も運用に定量分析の活用に取り組みようと考え、分析手法やプログラミングを最近再び始めるようになりました。かつて学生時代には、金融系のデータの定量分析をする研究を多少していたこともありますが、最近少し離れていたため、いろいろ思い出しつつ、新しいことも吸収しつつといった感じで進めています。このような分析について学んでいくほどに感じることは、統計的手法などを用いてデータを処理することは、データさえあれば何かしらの結果を得ることができてしまうという

<本資料に関してご留意いただきたい事項>

■本資料は、あくまで情報提供を目的としたものであり、一部主観及び意見が含まれています。最終的な投資判断は、ご自身の判断でなさるようお願いいたします。また、ファンドマネージャー等の実際の運用等に何ら制限を加えるものではありません。■本資料は、当社が信頼できると判断した情報を基に作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。■投資信託の取得の申込みに当たっては、投資信託説明書(交付目論見書)をお渡ししますので必ず内容をご確認のうえ、投資判断はお客様ご自身で行っていただきますようお願いいたします。

ことです。しかし、分析とはただ存在するデータに対して処理をするということではなく、能動的に物事同士の関係性などを導き出すという行為です。そのため重要なことは、どのようなデータを用いるか、得られた結果をどう解釈し、その後の行動に活かすかということになります。そしてこの部分は、それぞれの分野の経験や感性などを用いるアートのような世界でもあります。そのため、プログラムなど技術面で足りない部分は色々なツールなどに助けられながら、少ないながらも経験やセンスといった部分を活かして、技術に使われる側ではなく、技術を開発し使う側の人間として運用能力の向上を目指していきたいと思っています。

<本資料に関してご留意いただきたい事項>

■本資料は、あくまで情報提供を目的としたものであり、一部主観及び意見が含まれています。最終的な投資判断は、ご自身の判断でなさるようお願いいたします。また、ファンドマネージャー等の実際の運用等に何ら制限を加えるものではありません。■本資料は、当社が信頼できると判断した情報を基に作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。■投資信託の取得の申込みに当たっては、投資信託説明書（交付目論見書）をお渡ししますので必ず内容をご確認のうえ、投資判断はお客様ご自身で行っていただきますようお願いいたします。